

太宰治私論―「女の闘い」の頃

小田桐 弘子

1、はじめに

はや、太宰治没後五十年も過ぎた。昭和二十三年六月十九日は筆者にとつても、特別な感慨をもつて、憶い出される日である。当時、中学生であった、私には、姉や文学好きの先生方が、よくダザイさん、ダザイさんと、親しい先輩もしくは友人のように話題にしていた作家が十三日の夜から行方不明というニュースがあった。朝刊を読みながら、太宰を作家として好ましく思っていない父が、太宰はまだ見つからないらしい、との報道を伝え、ダザイ・フアンの姉と、議論していた。十四日、十五日に玉川上水の土手に男物と女物の下駄がの片方ずつが発見されたというニュースがあったものの、依然として見つからないまま、十九日の朝を迎え、食卓の話題はかなり暗い雰囲気であった。

中学生の私はその時期、中間試験の期間であった。午前中で、試験も終え、帰途、玉川上水が流れる所に橋がかかっている辺りに来たとき、お巡りさんとよんでいる警察官が橋のたもとに立っていた。朝、学校にいった時はいなかったのにと、思いながら橋にきた。縄のようなもので、上水の堤に通行を遮っていた。この堤は毎日のお散歩

の径であり、我が家では春にはお花見の場所で、近所では桜の名所として親しまれた場であった。その場が通行禁止なんてと、思った瞬間グザイさんが見つかったのだと直感した。

その後の報道によると、下駄などが発見された三鷹市から二キロも離れた東京都杉並区辺の下流まで流されてきたのである。

多くの若者を引き付けた太宰治の作品を、私も長ずるにつれて読んでいったけれど、読めば読むほど、年を重ねれば、重ねるほど主体的関心はもてずにくたというものが、正直な感想である。近代文学の授業でとりあげると、テキストに必ず太宰は収められているし、また毎年卒論に選ぶ学生がいて、好むと好まないとにかかわらず、勉強する必要に迫られて、この三十年間、外野で読んできたというべきであろう。その三十年間、はじめの若い頃の読後観そのものは変わりないが、意識して、読みだした時から、気になっている作品は「女の決闘」である。この作品が書かれた同じ、昭和十五年には、とくに高校、大学のテキストによく採用される「駆け込み訴へ」や、「走れメロス」も発表されている。いきおい、この時代に関心が動き、この前後に焦点をあてて、太宰について考えざるをえない。

2、一九四〇年の頃

人のこのころも

まこと信じてもらふには

十字架に

のぼらなければ

なるまいか

（イワン・ゴル）①

この章句は「古典風」に引用されているものである。「古典風」という作品は前にあげた作品と同年代、昭和十五年に雑誌『知性』に発表されたものである。この引用句は筆者の注目をひいてやまない章句である。

この作品は太宰治研究者からも、さほど論じられないものの一つであろうか。同じ一九四〇年に発表された「駆け込み訴へ」や「走れメロス」にくらべて、とりあげられることの少ないものといえよう。内容としては、伯爵家の嗣子美濃十郎が銀のペーパーナイフを盗んだ女中をかばい、好意をもつ。この十郎は作家のようで、創作ノートや作中作が挿入されている。十郎はこの女中に好意以上の気持をもち、秘密に交渉があったらしいが、解雇される。女中は解雇されたのち、十郎が彼女の家を尋ねたところ、相応の青年と所帯をもっているが、十郎はその夫と別れて欲しい、どんな苦しいことでもこらえる、と哀願するが、彼女は答えない。しばらくして、十郎は別な実業家の娘と華麗な結婚式をあげる。そして、へみんな幸福に暮した②で終わる。

この作品には十字架で罪をあがなうに値する、問題が提起されているとはいえないが、ここに十字架にのぼらなければ人の心も信じてもらえないのか、という厳しい人間観をわざわざうたわなければならなかった太宰の心象に関心が寄せられるのである。身分違いの恋愛に十字架にのぼり、自分の気持が本物であることを示されては、かえって、恐ろしく感じる人間もいる。何故、太宰はここで、誠実を信じてもらうためには、十字架にのぼらなければならぬか、という言葉をついたのであろうか。十字架にのぼり、その真実を信じてもらう、すなわち、命をかける恋愛を描いているわけでもない作品に何故この言葉を挿入したのであろう。

太宰は昭和十四年井伏鱒二の世話により、石原美知子と再婚する。美知子は中産階級のいわゆる良家の娘で、東京女高師、現在の御茶ノ水女子大を卒業し、当時都留高女で国語を教える先生であった。最初の妻で芸者出身の初

代とは違って、知的で、よく知られているように、「駆け込み訴へ」などは、美知子夫人の口述筆記によるもので、これほどに知的作業も可能な夫人であった。良家の出で、理知的な夫人と新しい生活を幸福に送っているはずの太宰の発言としては、気になる。

『富岳百景』はこの時代の代表作の一つである。臼井吉見は〈『ダス・ゲマイネ』や『二十世紀旗手』(昭十二・七版画荘)にくらべれば、構成や文体に大きな変化がある。平明で自然でおちついてきた。彼の人生が、惑乱と絶望から安定と希望へ推移したことを意味する。③とこの時期の太宰の作風の変化を指摘している。小山初代との時代の紛乱錯綜というか、凄絶な作風に比して、〈希望〉はともかく、文体的にも上記作品には、安定性があることは、一読者にも確かに感じられる。

なおも、この時期の作品をひもといてゆくと、次の字句に注目させられる。「くるしきは、忍従の夜。あきらめの朝。この世とは、あきらめの努めか。わびしさの堪へか。わかさ、かくて、日に蟲食はれゆき、仕合せも、陋巷の内に、見つけし、となむ」④この数行は、「I can speak」から見出されるものである。〈忍従〉も〈あきらめ〉も〈わびしさ〉も〈希望〉とは、およそかけ離れた、縁のない思いであろう。優しさや、悲哀に包まれたユーモアを感じさせる作品が多いこの時代の作品群の中で気になる字句である。

次に、「駆け込み訴へ」を読みなおしてみよう。この作品は昭和十五年二月『中央公論』に新人特選として北原武夫、太田洋子、真杉静枝、壺井栄らの作品とともに発表された。この作品は採り上げられ、論じられることの多いものであるが、筆者なりに考えていきたい。「駆け込み訴へ」の成立の背景については、美知子夫人の『回想の太宰治』やその他に詳しいが、全文が夫人の手により口述筆記された、という。たしかに文体の畳み込むような独特のスタイルは、それを首肯させられる。

発表後すぐに、高見順、林房雄、岩上順一らの批評を受けたし、その後、今日もなお、問題作であることは、『太

宰治全作品研究事典」⑤で、本作の担当木村小夜氏の詳細な解説にも明らかである。この作品の内容を紹介しながら、私の読み方で考えていこう。この話は、聖書に出てくるイスカリオテのユダが中心人物である。ユダは十二使徒の一人であるが、銀三十枚でキリストを大司祭に売って、後に自殺した。ユダは背信者という代名詞になっているが、使徒の一人であった者が何故キリストを売ったか、という理由は、いろいろ議論されているが、明らかではない。このユダの内面の心理に太宰は照明をあて、ユダの内面の心理の動きを追い、キリストへの愛の矛盾を示している。

太宰自身が「自作を語る」の中で、「走れメロス」とこの「駆け込み訴へ」が彼の内部で対応しあうといっている。「走れメロス」において、うたいあげた、人間に対する信頼と愛が、「駆け込み訴へ」では、愛と信頼が挫折したものの悲劇である。

キリストによる神の救いを信じられないユダがエゴイステイックな人間的な愛により、キリストに対する独占欲に動かされて、キリストの愛を理解・感得できずに、ついに憎しみに変わり、キリストを駆け込み訴える処に至る心理のプロセスが、冒頭のへ申し上げます。申し上げます。且那さま。あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ、我慢ならない。生かして置けねえ。⑥に始まり、すぐ、改行され、以下一度の改行だけで、一気ににエンディングに追い込む、技法と相俟って、緊張感をもって、描かれている。信仰者の愛と自己愛がユダの訴えの中に示される。ユダは自己愛はキリストは信仰者の愛に、憧れをいだきつつけるが、結局は銀三十枚で売る。ユダはへ誰がこの私のひたむきの愛の行為、正常に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらふ為の愛では無い。そんなさもない愛では無いのだ。⑦という。実はユダは自己愛の変形した愛をキリストに対していただいている。ユダの中にある、信頼と不信、愛と憎しみが表と裏のように、同一人の中に存在する。それを太宰はユダ、即ち人間存在そのものとして、みている。ここに

創造されたユダは、聖書に描かれ、実在したユダであり、今もわれわれのまわり、それどころか、私自身の内側そのものではないかと、太宰はユダに託して、自己の危うさと、その心理の構造を追求している。

先述したように、対極に位置付けられる作品が、「走れメロス」である。多くの「走れメロス」論には筆者が述べたような、信頼とか、友情の勝利ではなく、かなり懐疑的な「走れメロス」論がある。しかし、この作品はメロスが一度は弱さにまけそうになった、即ち、人間は苦しい時、友情よりも、自己本意になりそうになる弱さももっているが、終局的には、信頼が勝利している。同時期にかかれている二作からも、信頼・愛を両極端からみている、〈安定〉しているはずの太宰の心象風景が窺われるようである。

3、「女の決闘」を読む

「女の決闘」は昭和十五年一月から六月にかけて「月刊文章」に連載された。この作品は森鷗外の翻訳作品集『蛙』に収められた同名の「女の決闘」を作家が読み、解説してゆくというスタイルをとっているものである。太宰作「女の決闘」は、翻訳集『蛙』を手にしているのではなく、鷗外全集の第十六巻を読みながら自説を話し、または感想を述べるという形式をとっている。太宰も話のはじめで、鷗外の翻訳についてあれこれいつている。〈鷗外は、ちつとも、むづかしいことは無い。いつでも、やさしく書いて在る。かへつて、漱石のほうが退屈である。〉(後略)⑧などというのである。この辺の背景を先学の調査により紹介してみよう。鷗外は一九一九年(大正八年)、今までに翻訳したものの中から、単行本に収録されていないものを集めて『蛙』を出版した。鷗外の生前最後の翻訳集である。彼自身、これが最後の機会であることを意識したのであろうか、珍しく自序をつけている。それは次のようなものである。〈前略。わたくしは老いた。翻訳文芸を提げて人に見ゆるも恐らくは此書を以て終とするであらう。〉⑨

「女の決闘」は原作は Herbert Eulenberg ヘルベルト・オイレンベルク（一八七六一一九四九）の作品である。オイレンベルクについて、全集解説によりまとめると、ライン河畔の生まれで、後、デュッセルドルフや、ウィーンに行き劇作家としてデヴュー、劇評家・演出家として活躍した。鷗外はオイレンベルクに割に早くから、関心を寄せていて、『椋鳥通信』にかなり頻繁に報ぜられている。オイレンベルクはデュッセルドルフ時代は主に劇作が中心であったが、現在は主として、短編小説によって、さして高くはないが文名を留めている。また、オイレンベルクの短編小説は皆、端的に面白く、彼は短編の巧者であるなどと、評している。小堀桂一郎博士の詳細な調査により、やゝ詳細に鷗外の翻訳状況を紹介してみよう。

鷗外は明治四四年に入手したばかりのオイレンベルクの最新刊の小説集 *Sonderbare Geschichten*（『綺譚集』）からすぐに、「塔の上の鳥」と「女の決闘」の二篇を選んで、訳出した。西洋の新文芸をなるべく広く紹介することを志して、一作家から一作品位の割で採択していた当時の鷗外としては、これは珍しいことである。一九一〇年（明治四十三年）から、大正三年にかけての五年間は鷗外の翻訳小説生産量が生涯での最高潮に達した時期であった。ことに明治四十五年と大正二年の二年間に計三十篇余りもなされている。他に創作や『マクベス』や『ノラ』のような大作を含めた戯曲の翻訳をも発表していることを思うと、役所勤めの身分の人としては殆んど人間業とは思えぬほどの精力である、⑩と小堀博士は敬意をこめて、鷗外の翻訳についてのべておられるのである。

続けて、小堀博士の解説を参考とすると、「女の決闘」は劇作家として出発したオイレンベルクが散文にも手を伸ばしはじめた最初期の頃の作品の一つで、作品集の標題『綺譚集』が示すように、その時の彼は多分に綺譚趣味に導かれて創作を進めていた様である。これは実際に起ったこの種の事件に素材を採って書いたものではないかと思像されるが詳しいことはわからない。また、鷗外がやはり翻訳した「塔の上の鳥」にはなかった、悲劇的な、と同時期に厳しい倫理的な雰囲気作品を支配して、短篇小説作者としての彼が決して凡手ではなかったことを認識

せしめる、と小堀博士は評され、まことに示唆される点大きい。

オイレンベルクの「女の決闘」の荒筋を述べてみる。この話は次のように始まる。

古来例のない、非常な、この出来事には、左の通りの短い行掛りがある。

ロシアの医科大学の女学生が、或る晩の事、何の学科やらの、高尚な講義を聞いて、下宿へ帰つて見ると、卓の上にこんな手紙があつた。宛名も何も書いてない。⑪

この後に手紙の差出人は、女学生が今つき合っている男の妻と名乗り、手紙は決闘の申し込みであつた。この申し出に応じた女学生は拳銃射撃の名手という評判で、妻は決闘のために、拳銃を初めて買い求めるような具合であるから、当然、女学生がこの決闘に勝つであろうということは、予測できた。しかし、偶然、妻が勝ち、女学生が射殺される。勝ち残つた妻は自首し、獄中であえて遺書を残して、餓死を選び、自ら死んでしまう。この遺書は夫あてでもなく唯一度、檻房を訪れていた牧師にあてた自己告白であつた。

太宰はこの話を語りはじめ、原作者に対して不快感をもち、徐々にへ私（太宰）の小説になりかけて居る、⑫といながら、原作に太宰の創作した部分―夫を決闘の見物者として、立ち会わせる―を付け加え物語を追いかけている。この夫を下等の芸術家として、夫に多く語らせているが、ここにまさに原作にはない、饒舌な言葉がある。

ああ、けさは女房も美しい。ふびんな奴だ。あいつは、私を信じすぎてゐたのだ。私も悪い。女房を、だましすぎてゐた。だますより他はなかつたのだ。家庭の幸福なんて、お互ひ嘘の上でも無ければ成り立たない。いままで私は、それを信じてゐた。女房なんて、謂はば、家の道具だと信じてゐた。いちいち真実を吐露しあ

つてゐたんぢや、やり切れぬ。私は、いつもだましてゐた。それだから、女房は、私を好いてくれた。真実は家庭の敵。嘘こそ家庭の幸福の花だ、と私は信じてゐた。⑬

太宰作の話は最後のところで、夫―芸術家が妻の遺書を読む。

どうぞわたくしの心の臓をお労はりなすってくださいまし。あなたのご尊心なざる神様と同じやうに、わたくしを大膽に、偉大にに死なせてくださいまし。わたくしは自分の致した事を、一人で神様の前へ持つて参らうと存じます。名誉ある人妻として持つて参らうと存じます。わたくしは十字架に釘付けにせられたやうに、自分の恋愛に釘付けにせられて、数多の創から血を流してゐます。⑭

へあの女房が、こんなにも恐ろしい、無茶なくらゐるに燃える祈念で生きてゐたとは、思ひも及ばぬ事⑮であつた、と妻の激しい感情にうたれる。以後、再び妻はめとらずしかし、この芸術家は通俗作家として、世間的には認められ、六十八歳で大往生する。これを締めくくる部分を付け足し、自作と原作の評価を気にしつつ、終えている。

原作にはない部分を付け足して、太宰の解釈を加えた「女の決闘」については『太宰治全作品研究事典』に木村小夜氏の担当による詳しい調査があり、教示されることが多かつた。リアリズムの問題、文体論や翻訳論・女性論への示唆などへと、興味は尽きない。

ここで、筆者が注目してしまうのは、太宰らしく皮肉やもつてまわつた言い方をしながら、原作にはない夫―芸術家には皮肉な筆を加えて、一貫して通俗作家らしい人物を創造している。一方、女主人公は原作のまま激しい、炎のように燃える恋心を読み取る太宰の筆である。

女房の遺書の言葉へ十字架に釘付けにせられたやうに、という言葉から、「古典風」の

人のこころも

まこと信じてもらふには

十字架に

のぼらなければ

なるまいか

がリフレーションされ、響いてくる。太宰の改作「女の決闘」と原作を対比してみると、原作には、小堀博士の言われるへ悲劇的な、と同時に厳しい倫理的な雰囲気作品を支配して⑩いるが、太宰改作では通俗的な夫を見物者として、一見都合よく配置したことによって、二人の女性間の緊迫性が薄れていることは否めない。そこに太宰の意図があつたという見方もあるであろう。しかしながら、原作の女房の遺書、しかも宛先は夫ではなく、教悔師である。日本でも、刑務所に仏教、キリスト教の教悔師がいるが、原作において、へわたくしは、あなたの教で禁じてある程、自分の意志の儘に進んで参つて、跡を振り返つてもみませんでした。と告白する女房は、夫ではなく、相手を教悔師と充分に意識していることがわかる。太宰の原作に対する見方が各研究者の論に多く、確かに太宰が一種の反発を原作に感じていることは、行間だけでなく、太宰の語り口に表れている。それにもかかわらず、太宰もまた、女房の遺書の強烈さはそのまま、原作に従い、改作にも反映していることにひきつけられるのである。

太宰改作「女の決闘」の最終部でわざわざ、へみだりに神の名を口にせず、私のような悪徳者のところへも度々たづねて来てくれ⑪る牧師をおいている。この牧師に女房の遺書を読ませて感想をきく。

「あなたなら、この女房になんと答へますか。この牧師さんは、たいへん軽蔑されてやつつけられてゐるやうですが、これはこれでいいのでせうか。あなたはこの遺書をどう思ひます。」牧師さんは顔をあかくして笑ひ、やがて笑ひを収め、澄んだ眼で私をまつすぐに見ながら、「女は、戀をすれば、それつきりです。ただ、見てゐるより他はありません。」私たちは、きまり悪げに微笑みました。⑱

原作の牧師に宛てた遺書にこだわる太宰が、ここで読み取れるのである。遺書にかかれた女房の激しさを肯定する太宰は、先の牧師にいわせている、恋する女性の通性としての強さに対して、それを装いつつも共感しているのである。

4、その他をめぐって

昭和十五年は太宰にとって、きちんとした家庭を支える美知子夫人をえて、生活上は落ち着いて、多くの作品を執筆した年であった、といえる。「女の決闘」の連載が終つた六月の翌月の七月から十二月号まで「乞食学生」を、雑誌『若草』に連載した。この作品はまず、

大貧に、大正義、望むべからず

—フランソワ・ヴィヨン—⑲

という巻頭句をおいている。自分を作家の資格がない、無知で、深い思索が何もなく、ひらめく直感もない。十九

世紀の、パリの文人たちの中で、愚鈍の作家を「天候居士」と呼んでいた唾棄する習慣が在ったというが、まさに自分がそうだと自己嫌悪する作家が主人公である。というのは今へ一つの作品を恥づかしく思ひながらも、この世の中に生きてゆく義務として、雑誌社に送ってしまった後の、作家の苦悶に就いては、聡明な諸君にも、あまりおわかりになつてゐない筈である。⑳そして、送ったその作品はともまづいもので、へあの、甘つたれた、女の描写。わあと叫んで、そこらをくるくると走り狂ひたいほど、恥づかしい。(21)と自分をせめる。この作家がへ見事な一篇の醜作を、驛の前のポストに投函し、急に生きていることがるやになり(22)家にかえらず、家と反対の方角の、玉川上水の土堤に歩いているときに、遭遇する出来事から「乞食学生」は始まるのである。この出来事と直面している時に、自分はいつ死んでも惜しくないとか、急流といわれているこの川で泳いでいるアルバイト学生を助けようとか、共に死ななければならぬ、死所をえたというものかもしれないとか、非論理的に狼狽する作家である。

この作品には、「女の決闘」でみせた、自信にみちた作家は影をひそめ、むしろ「女の決闘」の最終部を否定しているかのような彼自身がいる。

この「乞食学生」では、冒頭部分の他にもフランソワ・ヴィヨンが引用され興味を引く。作中の作家がヴィヨンに共感し、次の詩を諷するが、アルバイト学生に侮蔑される。

若き頃、世にも興ある驕児たり

いまごろは、人喜ばす片言隻句だも言へず

さながら、老猿

愛らしさ一つも無し

人の気に逆らふまじと黙し居れば

老いぼれの敗北者よと指さされ

もの言へば

黙れ、これ、恥を知れよ袖をひかれる。（ヴィヨン）（23）

第六回の冒頭では、再び、次の詩を引用し、共感を示すのである。

「青年よ、若き日のうちに享樂せよ！」

と教へし賢者の言葉のままに、

振舞うた我の愚かさよ。

（悔ゆるともいまは詮なし）

見よ！ 次のペエジにその賢者

素知らぬ顔をして、記し置きける、

「青春は空に過ぎず、しかして、

弱冠は、無知に過ぎず。」

（フランソワ・ヴィヨン）（24）

この詩を詠んだヴィヨンの心情にいたく共鳴するのである。

昭和十五年の太宰の生活の裏の意識をみるものとして、「春の盜賊」中の一行に目を引かされる。即ちへ一路、生活の謂はば改善に努力して、昨今の私は、少し愚かしくさへなっている。行動は、つねに破綻の形式を執る。（25）、

という。この作品には「獄中吟」というサブタイトルがついていて、一見し、疑問をいだかせられ通読することになるのであるが、実際に刑務所にいれられてのことではない。昭和十五年一月『文藝日本』に発表されたものであるが、生活の改善に努力してゐる作家が主人公で、語り手である。彼は、もともと小市民的眞面目な生活になじまない性質の作家で、逆に行動的に破綻する、とくどくど自己弁解を述べるのである。最終部分の告白がやはり気になる。「この世に、ロマンチックは、無い。私ひとり、変質者だ、さうして、私も、いまは營々と、小市民的生活を修養し、けちな世渡りをはじめてゐる。いやだ。私ひとりでもよい。もういちど、あの野望と獻身の、ロマンスの地獄に飛び込んで、くたばりたい！できないことか。いけないことか。」(26)と激しく、かつての、デカダシな自分への回帰への野望を強く示すのである。ここには、現在の落ち着いた、安定した、といわれる生活態度、生活意識に対する自己嫌悪が明らかである。

「八十八夜」は昭和十四年八月『新潮』に発表されたもので、美知子夫人との再婚が同年一月であるから、半年後に執筆されたのであろう。「諦めよ、わが心、獸の眠りを眠れかし。」(C・B・) (27)なる、詩句を題につけている。諦めよ、とは何をあきらめよ、といっているのであろうか、大変気になる詩句である。

5、終わりに

以上、「古典風」に始まり、昭和十五年代の作品を数作ばかり、とりあげてみた。ここで結論とまではいかないが、否定しがたい、何か言わずにはいられないような、主張などというように明るい声ではなく、悲鳴のようなものが聞こえてくるようである。これは何なのだろうか。

多くの評者や研究者の論に述べられているように、確かに『富嶽百景』には、富士山の風景に一個の人間である、

太宰の感覚が見事に反応しあって、自然と人間の幸福な一体化がある。読者は皆、疑わずに、素直に、率直に太宰の過去の精算と、新しい出発を祝福しつつ、太宰の作り出した小宇宙に溶け込むことができた、と思った。その期待で次々と発表された上記の新作の雑誌の頁を開いた熱心な読者たちには、如何であったであろう。

火鉢にあたり、盃をふくみながら、新妻に口述筆記させながら書いたといわれている「駆け込み訴へ」における愛と憎しみの激しさ、「走れメロス」の懷疑に裏付けられた信頼、そして何よりも、「古典風」でそれほどの必然性があるとも思えない、へ人のこころも まこと信じてもらふには 十字架に のぼらなければ なるまいか、の詩句の引用に託した作者の心情に筆者は思いを走らせてしまうのである。その思いは「女の決闘」で頂点に達してしまっているのであるが、女の決闘と題し、この作品に通して描かれている愛に対する意識はあたかも女性固有の心情といつつ、実は、心情の激しさを肯定している作者がいる。これは、丁度、フロベールがボヴァリー夫人は私自身だ、といったように、「女の決闘」の妻は太宰自身の意識が仮託されているのではないだろうか。一見、穏やかな市民生活を新しい、才媛の妻と共に営みつつ、なおも、以前のデカダンスにみちた、反逆的な精神・生活への回帰意識を、自己確認していたのが、昭和十五年代の太宰であった、と考えられる。「乞食学生」において、不要とも思われる程のフランソワ・ヴィヨンの引用や、作品中での詩人・人間ヴィヨンへの言及などからも推察して余りある。本論ですでに引用した詩句でうたっているように、如何に若き日の自己を悔やみ、若き日の愚かしさを、へ気の小さい、弱い男（28）のヴィヨンが回顧しているかを強調している。後の「ヴィヨンの妻」への言及はここでは避けるが、関心をひいてやまないヴィヨンに対する太宰の共鳴をみることもできるのではないだろうか。

太宰研究者による「女の決闘」論は数多く、多くのご教示や刺激をいただいたことを記してここで謝意を表したが、その中で、山内祥史氏が、この作品をへ昭和十五年代前半期小説の集成（29）と見ていられることに同感するものである。

昭和十五年代の作品が太宰の全作品史において、どのように位置付けられるのか、続く次の年代の作品をも、思考射程にいれて考察するべきであるが、本論では清澄とか、軽妙な作品が多いといわれているこの時代をもう一度、私自身の目で作品を読み直してから考えたい、と思ったのである。その中で「女の決闘」は、オイレンベルクの原作においながら、原作との違い・改作の在り方に太宰の受容の仕方を明らかにし、且つ又、太宰の本質が語られてしまっている。この点に作者が意図しない、または、上手にカモフラージュしたつもりでも、それを越えてしまうものがあるのであろう。

鷗外がこれまでとは異なり、一作家一作品の習慣を破り、オイレンベルクのみ二作品を訳し、鷗外全集を手に講演している作家と称する太宰がこの作品を選んで、解説・改作するというのも、興味深いものがある。「女の決闘」が当時の太宰の心象風景にとって、響きあう作品・アナロジであったのであろう。

昭和十五年代は作家太宰の本質を考える上で、考慮するべき年代であろう。ひとりの作家にとって、忘れてはならない、どうしても無視できないある時・事件、エポック・メイキングがあるであろう。ここでは太宰にとって、昭和十五年の、一見、平和な家庭をえた時こそ、むしろいままでの自分を確認した時であったといえよう。

註

- ① 太宰治全集 第二卷「古典風」、筑摩書房 昭和四十八年、二三〇―二三二頁
- ② ①に同じ、二三二頁
- ③ 日本近代文学大事典第二卷、講談社 昭和五十二年、三三二頁
- ④ ①に同じ 第二卷「I can speak」、一五〇頁

太宰治私論—「女の闘い」の頃（小田桐）

- ⑤ 神谷忠孝・安藤宏編 太宰治全作品研究事典、勉誠社、平成七年、六〇―六二頁
- ⑥ ①に同じ、一四六頁
- ⑦ ⑥に同じ、一五六頁
- ⑧ ①に同じ、二三四頁
- ⑨ 鷗外選集 十三卷、岩波書店、一九七九、三二―三五頁
- ⑩ ⑨に同じ、十七卷、小堀桂一郎解説 三五―四頁
- ⑪ ⑩に同じ、二六二頁
- ⑫ ①に同じ、「女の決闘」、二四三―二四四頁
- ⑬ ⑫に同じ、二五八頁
- ⑭ ⑫に同じ、二七四頁
- ⑮ ⑫に同じ、二七五頁
- ⑯ ⑩に同じ
- ⑰ ⑫に同じ、二八〇頁
- ⑱ ⑰に同じ
- ⑲ ①に同じ、「乞食学生」、二八一頁
- ⑳ ⑲に同じ
- ㉑ ⑲に同じ
- ㉒ ⑲に同じ、二八三頁
- ㉓ ⑲に同じ、二八七―二八八頁
- ㉔ ⑲に同じ、三二〇―三二二頁
- ㉕ ①に同じ、「春の盗賊」、一二四頁
- ㉖ ㉕に同じ、一四五頁
- ㉗ ①に同じ、三頁

⑳ ㉑に同じ、三三一頁

㉒ 始めに、㉓の木村小夜氏の論説にご教示をうけたことを記したい。山内祥史「短編集『女の決闘』の成立」神戸女学院大学論集「二
十三の二、昭和五十一年